

子どもの自殺対策の現状と課題

一般社団法人 高橋聡美研究室
BPO（放送倫理・番組向上機構）青少年委員
前防衛医科大学校 精神看護学教授
高橋聡美（医学博士）

高橋聡美の取り組み (学校や教育委員会からの依頼を受けて)

- 1次予防 (啓発)

学校における自殺予防教育

教職員・保護者・民生委員らへのSOSの受け止め研修

- 2次予防 (ハイリスク者介入)

「死にたい」と言う子や未遂のあった子どもへの介入

リストカット・風邪薬のODへの対応

- 3次予防 (自死が起きた後の介入)

自死が起きた後の学校への危機介入

遺児のケアプログラム

1次予防の現状

自殺予防教育・SOSの出し方教育

現状：地域によって進捗差がある

カリキュラムを作成している地域

単発で実施している地域

全く実施できていない地域

課題1 支援体制の不備

カリキュラム・テキスト・人材派遣
教育を行うための研修等

課題2 自殺対策課（役場）と教育委員会の連携

教育委員会の協力が得られないor別々に実施

自殺担当課は教育委員会や学校の協力がないと授業ができない

2次予防の現状

子どものSOSの受け止め

現状：相談を受ける側のひっ迫

SC・SSWの不足→地域格差がある

保健室も限界

教職員の精神疾患による病気休暇は過去最悪

課題 支援体制の不備

SOSの受け止めの研修

→死にたいという子や自傷を繰り返す子どもへの対応の研修が必要

SC/SSWの配置が絶対的に不足

→予約でいっぱいあるいはたまにしか来ないので機能していない

2次予防の現状 未遂者対応

現状：未遂者へのフォローが整備されていない

子どもに限らず未遂者へのフォロー体制は地域に差がある

課題 学校もしくは家庭が問題を抱えがち

未遂があった場合のフォロー体制を整る

→どこに連絡をし、どこと連携をとった方がいいのか明確に

未遂者対応研修の必要性

3 次予防の現状

在校生が自殺した場合

現状：在校生と教員へのグリーフケアが届きにくい

課題 グリーフケアの啓発不足

自死が起きた場合の研修が必要
管理職向け・SC向け・養護教諭向け

教職員のわかちあいの会が必要→やり方がわからない
自死遺族のわかちあいの会の経験者の派遣が必要

3 次予防の現状

保護者の自死があった場合

現状：子どものグリーフケアが不十分

自死遺族のわかちあいの会は全国にあるが、
子どものグリーフの場は全国に28か所

課題 支援体制の不備

遺児のグリーフサポートの場を増やす

→各都道府県に1か所を目標に (USAには500か所以上ある)

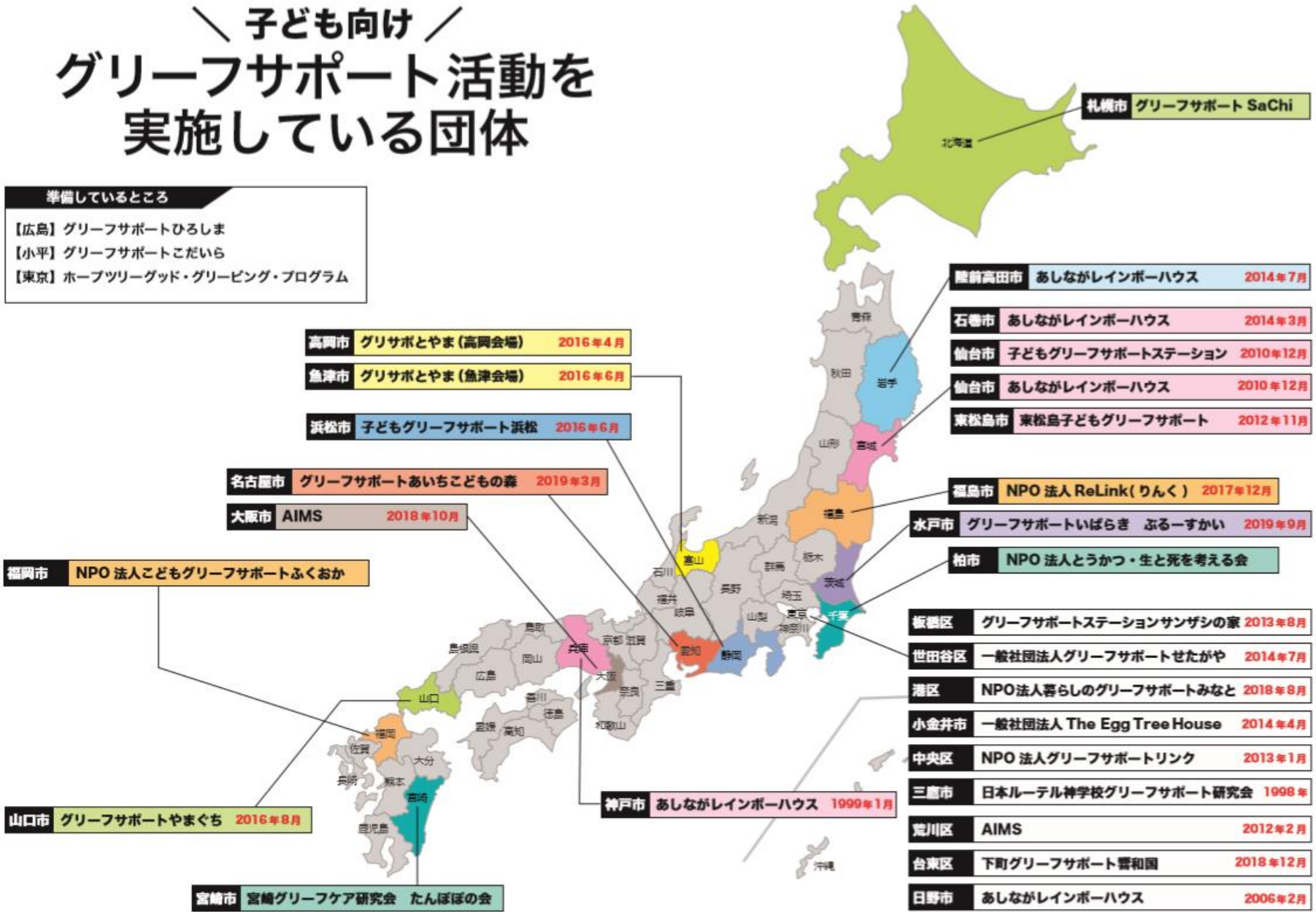
保護者の自死があった場合、学校が連携が難しい

→地域と学校が連携できるような大切が必要

子ども向け グリーフサポート活動を実施している団体

準備しているところ

【広島】 グリーフサポートひろしま
 【小平】 グリーフサポートこだいら
 【東京】 ホープツリーグッド・グリーピング・プログラム





改訂版

教師にできる 自殺予防

子どもの**SOS**を見逃さない

中央大学客員研究員／前防衛医科大学校教授

高橋聡美

教育開発研究所

1次予防 授業案

2次予防 SOSの受け止めかた
リストカットの対応など

3次予防 子どものグリーフケア

子どもの自殺予防 今、現場に必要なこと

• 1次予防

自殺予防教育・SOSの出し方教育のカリキュラム化

テキストなどの教材作成

授業を担う人材の派遣

授業を行うための研修の実施

自殺担当課と教育員会の連携のための支援

そもそも子どもの自殺の半数以上が原因は不明のままになっている
→原因がわからないままでは効果的な対策は練られない

心理学的剖検など安心・安全な枠組みの中での原因究明が必須

• 2次予防

SC・SSWの増員

→チャイルドラインなど匿名で相談できる場所だけではなく
身近に専門家がいて、子どもも教員も保護者も相談できる体制を

SOSの受け止め研修の実施

自殺未遂が起きた場合の地域連携

→子ども・家庭・学校をサポート

• 3次予防

在校生に自死があった場合

自死遺族支援に詳しい人材の派遣

教職員のケア（SCも含め）

SCや養護教諭に対する自死によるグリーフサポートの研修の実施

保護者が自死で亡くなった場合

自死遺族支援に詳しい人材の派遣（本人や遺族の意向に沿って）

全国の子どものグリーフサポートの場づくりの支援

→ボランティア養成講座・運営支援など

学校外で現状に即応する具体的対策

女子高校生の自殺増加
市販薬への対応

若者の自殺増加
ストロング系アルコールの販売

高校生医療費無償制度による睡眠薬集め
医師会などへの注意喚起